
butterfly

高田那美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

b u t t e r f l y

【Nコード】

N 5 6 1 7 A

【作者名】

高田那美

【あらすじ】

私は蝶と出会う。その美しさを残すため、写真を撮りつづける僕。やがて季節が巡り、別れが訪れる

Butterfly

> b r <

> b r <

彼女は自らを蝶だと言い、私もそうだと言った。 > b r <

「でもまだ私は芋虫よ。春まで待たなきゃ、蝶にはなれない」 > b r <

私の部屋の押し入れの中で、膝を抱えた胎児のような格好で寝転びながら、彼女は言った。 > b r <

「じゃあ待とう。君が蝶になるまで」 > b r <

私の言葉に彼女は微笑み、そつと目を閉じた。 > b r <

私はインスタントカメラで彼女の姿を撮った。出来た写真は押入れの向かいの壁に画鋲で張りつけた。 > b r <

「なんで、そんなことをするの？」 > b r <

子供のような声で彼女が尋ねた。 > b r <

「なんでだろうね」 > b r <

私は答えた。 > b r <

夏が終わる頃だった。 > b r <

> b r <

彼女の生活サイクルは極めて単純だった。「食事」と「睡眠」。彼女は一日中その二つを繰り返した。大量の野菜を食い尽くし、押入れの中で睡眠を食らい続ける日々を、彼女は秋の間続けた。 > b r <

「ねえ、外はどんな様子なの」 > b r <

キャベツの葉を玉から箸取りながら、彼女は私に聞いた。私は

窓まで行き、彼女の白く滑らかな身体から外界へと視線を移した。

> b r <

外では強い風が吹き、ほんの数枚しか残っていない街路樹の木の葉を、全て落としてしまおうと躍起になっているようだった。 > b

r <

「風が吹いているよ」 > b r <

「木に葉っぱは？」 > b r <

「もう殆どついていない。皆茶色く変色して、地面に落ちてしまっている」 > b r <

「人は歩いている？」 > b r <

「いいや、誰も。もう随分寒くなったみたいだから、皆外に出たがらないんだろう」 > b r <

「淋しい？」 > b r <

「外の様子がかい？」 > b r <

「いいえ、あなたが」 > b r <

「君がいれば平気さ」 > b r <

私が言うと、彼女は困ったように笑った。 > b r <

「けど、私は春になるとあなたの元からいなくなるのよ」 > b r <

私は何も言わず、ただ彼女の姿をインスタントカメラに収め、写真の壁に張りつけた。壁は最早、夥しい量の彼女の写真で埋め尽くされていた。 > b r <

夏から毎日、私は彼女を写真に撮っていた。さながら、小学生が昆虫の観察日記でもつけるかのように、私は義務感すら感じながら、彼女を撮りつづけた。 > b r <

義務感。 > b r <

私は彼女の姿を目に見える形で残さなければならなかった。そう思わせるほどの美しさが彼女にはあった。 > b r <

儚く、脆く、危なげな彼女の美は、蝶の羽のように完成されており、私はやはり彼女は蝶なのだと確信した。 > b r <

> b r <

冬になり、彼女は蛹になった。 > b r <

押入れの中で、胎児のような格好で寝転がり、静かに眠る彼女の周囲に緑色の靄のようなものが被さり、彼女はぴくりとも動かなくなつた。私はその靄が彼女の殻だということに、しばらく気付かなかつた。 > b r <

彼女が蛹になつてからも、私は毎日彼女の写真を撮つた。前日と同じポーズのままにいる彼女は彫像のようであり、私は彼女が蛹のまま蝶にならずに、私の元に居続ければ良いと思つた。 > b r <

いつか彼女が言つた言葉が心の中に残つていた。 > b r <

写真は冬が始まる頃に部屋中の壁を覆い尽くし、冬が終わる頃には天井までをも覆うほどに増殖し続けた。 > b r <

> b r <

窓から見える街路樹に、花が咲いた日だつた。 > b r <

いつものように彼女の写真を撮ろうと押し入れを開けると、それまで眠つていたはずの彼女が起き上がり、私に微笑みかけた。 > b r <
「お別れを言おうと思つたの」 > b r <

冬の間彼女を守り続けた靄はどこかへ消え失せていた。代りに彼女の背中から、四枚の真つ青な羽が生えていた。 > b r <

彼女は私の知らぬ間に、脱皮を終えていたのだつた。 > b r <

「ねえ、窓を開けて」 > b r <

私は動かなかつた。押入れの中に彼女を閉じ込めるような形で立つたまま、黙つてカメラのシャッターを押し、最後の写真を撮つた。 > b r <

彼女はそんな私を見て、優しく言つた。 > b r <

「そんなことをしなくても、大丈夫よ」 > b r <

彼女は私を押しのと、軽やかに窓まで行き、力一杯窓を開け放つた。 > b r <

風が吹き込み、それと共に街路樹に咲いていた花の花弁が何枚か部屋に舞い込んだ。 > b r <

彼女は窓に腰掛けた。 > b r <

「ねえ、気付いてる？」>br<

「なにに？」>br<

「全てに」>br<

「さあね」>br<

私の答えに曖昧に頷き、彼女は窓から大きく身を乗り出した。>

br<

「さよなら」>br<

消え入るような声と共に、彼女は窓の外へと、落ちるように飛んでいった。>br<

窓からは依然、風が吹き込んでいた。>br<

>br<

彼女がいなくなり、私の元には大量の写真が残った。しかし、その中のどれにも、彼女の姿は映っていなかった。>br<

しかし問題はなかった。>br<

彼女が言ったように、そんなことはしなくてもよかったのだ。>

br<

何故なら私の頭の中には、窓から外へと飛んでいった彼女の美しい姿が、蝶のそれよりも遥かに完成された美が、しっかりと焼き付いてるのだから。>br<

>br<

>br<

>br<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5617a/>

butterfly

2011年1月16日08時18分発行